

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] Vol.247

11-12

November - December 2021



荒井良二「たいようオルガン」表紙の原画 ©偕成社

巻頭

02

音と絵が織りなすカラフルな旅

- 02 小さな聴き手のためのコンサート たいようオルガン
- 04 クリスチャン・ツィメルマン ピアノ・リサイタル
- 06 クリスマス・プレゼント・コンサート
- 08 INFORMATION

水戸芸術館
ART TOWER MITO

人気絵本作家・荒井良二の『たいようオルガン』がカラフルな音楽に！

小さな聴き手のためのコンサート「たいようオルガン」

文・高巢真樹



小林 沙羅



石丸 由佳



野村 誠



荒井 良二

空のうえでオルガンを響かせる太陽に見守られ、ゾウバスは走る、どこまでも——。3歳以上のお子さまから楽しめる、今年の「小さな聴き手のためのコンサート」のメインでお届けするのは、絵本作家・荒井良二さんの絵本『たいようオルガン』を元に野村誠さんが作曲した、オルガンとソプラノのための音楽版〈たいようオルガン〉。この秋はひととき、スクリーンに映し出される絵と音楽が織りなす楽しい旅へと一緒に出かけてみませんか。

絵本に満ちている自由な精神

企画の源である絵本『たいようオルガン』の作者、荒井良二さんは、児童文学界のノーベル賞ともいわれるアストリッド・リンダグリーン記念文学賞を日本人として初受賞するなど、唯一無二の作風が世界的に評価されている絵本作家です。その荒井さんの代表作の一つが、2008年に出版され、IBBYオナーリスト（世界の優良図書）にも選ばれた『たいようオルガン』。この作品の中で、太陽は空の上でオルガンを弾き、ゾウバスは大地を走って

います。道中で、いろんな人が乗ったり降りたりしながら、ゾウバスは野山やにぎやかな町、海など、遠くへ遠くへと旅します。ページをめくるたびにがらっと世界が変わるさまも魅力的です。鮮やかな色彩感や、リズムカルな言葉にふれていると、まるでゾウバスと旅に出ているような気分が味わえます。「ゾウバスの旅を、オルガンと歌／語りで表現できたら、きっとすてきな音楽が鳴り響くのではないか」。そんな好奇心をかきたてられ、水戸芸術館発の音楽版『たいようオルガン』の制作がスタートしました。

この春、荒井さん、そして作曲をお願いした野村誠さんと打ち合わせをした際、荒井さんがこんなことをおっしゃっていました。「絵本にこう書いてあるから、必ずこう始まってこう終わらなきゃ、ということはないと思っている。絵本ってそういうものじゃなくて、読む人の感覚で何かを付け足してもいいし、反復してもいいと思うんだよね。だから今回の曲も、音を使って絵本の世界を広げるわけだから、頑なさはいらないような気がする(…)」なん

じゃこりゃ、みたいな曲ができれば面白いかも!」。こうして同じく、自由で開かれた精神の持ち主である野村さんへと、バトンが渡されました。

世界の多様性について作曲する

野村誠さんは、既成概念にとらわれないユニークな音楽活動を国内外で展開している作曲家です。水戸芸術館では、現代美術ギャラリーの『ジョン・ケージのローリーホーリーオーバー・サーカス』展への参加(1995年)、箏や鍵盤ハーモニカを使ったワークショップ実施と作曲・上演(2002年・2008年)、テアトロ・ムジク・インプロヴィーズでの「うつくしいまち」上演と水戸市立植物公園でのワークショップ実施(2018年)など、子どもたちと多彩なコラボレーションを重ねてきました。また荒井さんとは全国各地で共演しており、絶大な信頼を得ています。野村さんは、今回のオファーを受ける前から『たいようオルガン』を持っていて、元々大好きな絵本だったそうです。

6月から始まった作曲について、野



村さんご自身のウェブサイト(「野村誠の作曲日記」)にその様子を日々綴っていました。その中で特に印象的だった言葉をご紹介します。

「ぼくは荒井良二さんの絵本の世界や色彩感や遊びの感覚を、オルガンで表現したいんだ。荒井さんのテキストに作曲したいのではなく、荒井さんの絵とセッションする音楽を書きたい。だから、テキストは朗読になったり、歌になったり、場合によっては読まれないことさえあるかもしれない。そう思ったら、いろんな楽器をおもちゃ箱をひっくり返したように散らかして、遊び始めた。自由に遊び始めたら、作曲が始まった。(…)のびのびと遊び、単色のオルガンではなく、カラフルに色合いが変わっていくオルガンに、時々、声が重なっていくだろう。声色もカラフルに変化していくだろう。」(2021年6月7日)

「ただただ、ゾウバスが走っていくうちに、風景が変化したり、天気の変化したり、時間に変化する絵本なので、その変化を音楽でしっかり提示したい。それは、ぼくなりの絵本の魅力を伝えたいと同時に、パイプオルガンの音色も七変化して、オルガンの世界の多様さ、音楽の多様さ、世界の多様さ、を伝えたい。多様性と自由について、ずっと作曲している。」(6月28日)

その後、野村さんは7月末に水戸を訪れてくださり、実際に当館のオルガンに触れながら滞在制作を行いました。初日には、今回演奏をお願いしたオルガニスト・石丸由佳さんも合流し、作曲家の疑問や質問に実演付きで答えてくださいました。その後も、3,283本あるパイプの音色にじっくり耳を傾け、その個性を活かしながら、オルガンとソプラノのための新曲を完成させていただきました。作品は全14曲。〈ゾウバスタッカータ〉〈DJくもりのくも〉〈おちゃいいただきファンファーレ〉など、いずれも遊び心いっぱいの曲名が並んでいます。

ゾウバスの旅を奏でる二人の 名手たち

この新曲を演奏するにふさわしい二人の出演者をご紹介します。オルガンは、多彩な音色を駆使した躍動感あふれる演奏で高く評価されている石丸由佳さん。石丸さんはなんと、絵本とオルガンのコラボレーションを実現するのが学生時代からの夢だったとか。まさに今回の企画にぴったりなオルガン界の新星です。ソプラノは、優しい馥郁とした歌声が魅力の小林沙羅さん。全国各地で、オペラの話作にひっぱりだこの歌姫である一方、言葉に対する鋭敏な感性を生かし、詩と音楽によるパフォーマンスにも積

極的に挑戦されています。また現在は子育て中でもあるとのこと。「たいようオルガン」はもちろん、前半の日本の歌のステージでも、子どもたちに温かく歌いかけてくれることでしょう。

色とりどりで心温まる、とびきりユニークなゾウバスとの旅へ、ぜひ一緒に出かけましょう!



「野村誠の作曲日記」
QRコードはこちら



■公演情報

小さな聴き手のための コンサート たいようオルガン

2021.11.3(水・祝) 14:00 予定枚数終了
全席指定

1階席 子ども(3~12歳) ¥1,000
一般(12歳以上) ¥2,500
2階席 子ども(10~12歳) ¥800
一般(12歳以上) ¥2,000

●プログラム

井上武士:うみ
中田喜直:ちいさい秋みつけた
野村誠:たいようオルガン
(水戸芸術館委嘱・世界初演、原作 荒井良二
『たいようオルガン』[偕成社] ほか



絵本「たいようオルガン」表紙 ©偕成社

クリスチャン・ツイメルマン 「完全」追求のその先に

文・中村 晃



ツイメルマンとショパン・コンクール

ポーランドの首都ワルシャワで5年に1回開催されている、ピアニストの登竜門として名高いショパン国際ピアノコンクール。水戸芸術館で11月19日にリサイタルを行うクリスチャン・ツイメルマンは、同コンクールに1975年に優勝しています。当時、ツイメルマンは、その15年前に優勝したポーニと同じ弱冠18歳で、しかも20年ぶりのポーランド人優勝者ということで、大きな注目を集めました。ちなみに、水戸芸術館で2019年11月にリサイタルを行ったラファウ・ブレハッチは、ツイメルマン以来30年ぶりの同コンクールのポーランド人優勝者です。また、近年水戸室内管弦楽団との共演を行っているマルタ・アルゲリッチはツイメルマンの10年前、1965年の同コンクールの優勝者です。

このコンクールに優勝すると、たちまち世界中の檜舞台に躍り出ることになります。ツイメルマンもその例外ではありませんでした。世界各地でリサイタルを行い、コンクール優勝後の5年間に、ヘルベルト・フォン・カラヤン、レ

ナード・バーンスタイン、小澤征爾、キリル・コンドラシン、ピエール・ブレーズなどの指揮者との共演がなされてきました。しかし、その後ツイメルマンはヴィルトゥオーゾのキャリアは追求するに値しないと考えるようになり、外部の要請に応じて演奏会をどこでも開くというのではなく、演奏会の回数もごく少ない数に限って、みずからの芸術上の信念にもとづいて、今日まで活動を行ってきています。

「完全」を目指す妥協なき追求

ツイメルマンが「今、世界で望み得る最高のピアニスト」と賞されるのは、一切の妥協を許さない「完全主義者」であることが、最大の理由となっているように思います。ツイメルマンは次のように語っています。

「自分の音楽を完全に納得のいく形で演奏し、聴いてもらいたいです。少しでも不満の残ることがあったら、ステージに乗せるべきではありません。音楽は神聖なもの。演奏家は完璧な準備をして本番に臨むべきです。そうでないと人々の心を真に打つ音楽は

生まれません。私は演奏家が全面に出るのではなく、作品のすばらしさ、作曲家の意図したことをピアノで伝えたいと考えています。それが私の使命ですから」。(伊熊よし子:『35人の演奏家が語るクラシックの極意』2019年 学研プラス刊)

ツイメルマンの「完全」を求める追求の第一歩は、徹底的な作品研究にあります。楽譜上のあらゆる細部に至るまでメスを入れ、その微細なパーツひとつひとつを磨き上げていきます。そして、次のステップとして演奏の実践において、「完璧」な演奏技術によって作品全体が再構築され、全てが研ぎ澄まされた圧倒的な存在として私たちの前に立ち現れます。

また、ツイメルマンの「完全」への追求は、楽器へのこだわりにも見ることができます。今日のほとんどのピアニストは、楽器の調整はピアノ技術者に任せています。しかも、ピアニストは他の器楽奏者のように自分の楽器を持ち運ぶということが難しく、演奏会場にあるピアノを使用するのが通例です。この場合、ピアニストにとって満足のできる楽器や調整状態ではないというようなことに遭遇するリスクが存在します。「完全」を目指すツイメルマンは、こうした自身のコントロールの外に置かれてしまう楽器の問題を解消する為に、自らがピアノ技術者となり、自らが望む最高の音を求めて楽器を調整します。しかも彼にとって、演奏する作品によって楽器に求める音は異なることで、プログラムに合わせて、また演奏会場のアコースティックに合わせて、途方もなく緻密な調整が行われることとなります。そして、この自ら調整した楽器が、世界中のホールに持

ち込まれ、演奏会が行われます。

さらに、ツィメルマンのコントロールの外に置かれたものとして、協奏曲の演奏におけるオーケストラの存在があります。勿論、独奏者は指揮者とコミュニケーションをとり、自分の音楽をオーケストラに共有してもらおうと努めますが、「完全」を求めるツィメルマンにとっての理想は、自分のオーケストラを作ってしまう、指揮者を介在させることなく、自身の弾き振りでオーケストラをリードすることでした。それが最初に実行に移されたのが、1999年、ショパン没後150年の機会に、ショパンの2つのピアノ協奏曲の再録音を行った時のことでした。ツィメルマンは、オーディションを行い、全員がショパンと自分と同郷のポーランドの若い音楽家を集めてオーケストラを編成しました。そして、自身の理想とするショパンの演奏を実現するために、ソロ・パートはもちろんのこと、オーケストラ・パートにも自らの解釈・表現を徹底させました。

「渴望」のプログラム

リサイタルのプログラムについて、ツィメルマンは次のように語っています。「ベーシックに言うと、私はプログラムをできるだけ遅く出すようにしたい。誠実であるために。その時点で、自分が正直に演奏したい曲目で構成したいのです。レパートリーというのは「飢え」のようなものだから、私がこの2年のうちにどのような渴望を抱くかをできるかぎり予見はしますが、それでも2年経って、このプログラムを弾きたくないからと破棄するようなことはしたくない」(『埼玉アーツシアター通信vol.20』2009年3-4月号 [公財]埼玉県芸術文化振興財団刊 所収の青澤隆明氏によるインタビューより)

この言葉にある通り、今回のリサイ

タルのプログラムも、公演のおよそ2か月前に発表されました。その演奏曲について、眺めていくことにしましょう。

最初に演奏されるのは、J.S.バッハの〈パルティータ 第1番〉BWV825と〈パルティータ 第2番〉BWV826。J.S.バッハの作品について、ツィメルマンは次のように語っています。「私はひとつの作品を完全に自分の音楽にするまで、約10年はかけます。たとえばJ.S.バッハの作品は子どものころからオルガンを弾いていましたのでなじみ深いのですが、現代のピアノでいかに表現するかということ考えた場合、その練習には長い年月を要します。フレーズ、リズム、主題、和声、構成など、考えることは山ほど。それをひとつずつクリアしていく。高い頂を目指して一步一步登っていくような作業です」。(伊熊よし子氏の前掲書より)

続いて演奏されるのはブラームスの〈3つの間奏曲〉作品117。ブラームスは晩年に4つのピアノ曲集を残していて、作品117はその中の1つです。ブラームスがこの世を去る4年前、1892年に作曲されました。ツィメルマンは、作曲家が死を迎える年と自身の実年齢を重ねて考えることがしばしばあり、今回のブラームスの晩年の作品は、ブラームスが64歳で世を去った歳と同じになったことを意識しているのではないかと考えられています。ブラームスは、ツィメルマンにとってはとても近い存在の作曲家でもあると話していたこともあり、今回は作品の中により一層切実な形で自己が投影されるのではないかと推察されます。

そして、最後に演奏されるのが、ショパン作品の中でも最高峰をなす傑作と評されている2つのピアノ・ソナタのうちの1つである〈ピアノ・ソナタ 第3番 短調〉作品58です。ツィメルマンのこれらの作品への思いは特別に大

きなものがあります。「私は生まれたその瞬間から、ショパンの音楽とともに歩んできたのです。その後、音楽を本格的に学ぶようになってからは、自分からもショパンとの関わりをもつようになりまし。今回のレパートリーで言えば、変ロ短調とロ短調の2つのソナタは、35年にもわたって私の人生を伴奏してきてくれた作品です。私が感情的に激しく揺れ動いた時期に、かならずそこにいて、スポンジのように私の感情を吸いとってくれた曲なのです。その意味で、私の解釈はとても個人的なステイトメントなのだと思います」。(ジャパン・アーツ ウェブサイト『ピアニストたちの素顔』より 青澤隆明「Happy Birthday, Chopin!」(2010年)

この作品は1844年に作曲されていますが、当時のショパンは健康を損ない、父ミコワイの死に直面し、さらにサンドとの生活も破局のきざしを見せ始めていました。しかし、この作品は暗い現実を跳ね返すかのような輝きを纏っています。新型コロナウイルス感染症の流行が暗い影を落とす今日にあって、ツィメルマンはこの作品を通して、どのようなメッセージを届けてくれるのでしょうか。水戸芸術館では、このリサイタルを今日の困難を乗り越えるための炬火となることを願い「シリーズ：希望の音楽」の第1回公演としてお贈りいたします。

■公演情報

クリスチャン・ツィメルマン ピアノ・リサイタル

2021.11.19(金) 19:00 予定枚数終了
[全席指定]A席¥4,000・B席¥8,000

●プログラム

J.S.バッハ：パルティータ 第1番 変ロ長調
BWV825
J.S.バッハ：パルティータ 第2番 短調
BWV826
ブラームス：3つの間奏曲 作品117
ショパン：ピアノ・ソナタ 第3番 短調
作品58

クリスマス・プレゼント・コンサート2021

1年の終わりに、笑顔になれるコンサートを

文・鴻巣俊博

毎年恒例、水戸出身の作曲家・池辺晋一郎さんの企画とお話してお届けしている「クリスマス・プレゼント・コンサート」。今年はまさにクリスマス当日、12月25日の開催です。今年も不安が払拭されない1年間でしたが、年の締めくりに少しでも笑顔になれるよう、豪華な演奏家たちを迎えて華やかにお贈ります。

“伝統と革新”の津軽三味線



コンサートの幕開けを飾るのは、今年ソロデビュー20周年を迎えた茨城県日立市出身の三味線演奏家、上妻宏光さんのステージです。上妻さんは6歳で津軽三味線を始めて数々の大会で優勝、15歳で上京してからは独学で研鑽を積み、26歳の時にアメリカで武者修行をするという、異色の経歴を持つ演奏家。純邦楽のすば抜けた技術を基礎に持ちながら、ジャズピアノのハービー・ハンコックやヴォーカルの矢野顕子など、邦楽の枠を超えた国内外のアーティストとも共演を重ね、これまでに世界30ヶ国以上で公演を行うなど、“伝統と革新”の求道者として唯一無二の活動を繰り広げています。

今回演奏する3曲は、どれも上妻さんの十八番中の十八番。〈津軽じょんから節〉は亡き城主の墓を守ろうとしたがために、時の為政者に追われて川に身を投げた僧侶・常縁への慰霊の歌が起源だと伝えられています。南津軽郡を流れるその川は村人たちの間で「常縁河原」と呼ばれ、それが次第に「上河原」、「じょんから」へと訛っていったとのこと（諸説あり）。オリジナル曲〈紙の舞〉は、上妻さ

んが子どもの頃常陸多賀駅から家に帰る途中に陸橋から紙が舞い散る光景を目にし、その印象から生まれた作品。唯一の愛弟子であった志村けんさんは、この曲に惚れ込んで上妻さんに弟子入りを志願しました。そこはかかないもの悲しさと風情を湛えたこの曲を聴けば、志村さんが惚れ込んだのも頷けます。〈津軽よされ節〉は、津軽を飢饉が襲った時に人々が「こんな世は早く去れ」と歌ったのが始まりだと言われ、疫病が蔓延する世に生きる私たちと近い想いを感じる民謡です。太棹に張られた三本の弦からはじき出される力強くも繊細な生の音色は、私たちの身体の内まで届き、心をも震わせることでしょう。

金管の名手たちの饗宴



第2ステージでは水戸室内管弦楽団(MCO)のゲスト奏者としてもお馴染み、金管楽器の名手たちのアンサンブルをお届けします。今回ご出演の4人はMCOだけでなく「サイトウ・キネン・オーケストラ」にも参加、そしてその中の精鋭を集め、小澤征爾館長も絶賛する「サイトウ・キネン・オーケストラ・プラス・アンサンブル」のメンバーとしても活躍する面々です。

トランペットの高橋敦さんは東京都交響楽団の首席奏者や数多くのアンサンブルの1番奏者を受け持つ傍ら、ソリストとしても活躍。服部孝也さんは2019年まで新日本フィルハーモニー交響楽

団の首席奏者を25年間務め、現在は後進の育成にあたりながら多彩な演奏活動を繰り広げているトランペット奏者です。2人が演奏するのは、同じ楽器2本のために書かれた池辺晋一郎さんの〈バイヴァランス〉シリーズ中9番目の作品。2012年に高橋さんが初演を務めました。この曲は一聴すると最初から最後まで1人が主旋律を、もう1人が伴奏となる刻みの音符を吹いているように聞こえますが、実は1小節ないし2小節ごとの非常に短いスパンで旋律と伴奏を吹く奏者が入れ替わる超難曲。パートの入れ替わりを聴く人に意識させないため、2人の音量や音質を極限まで近づけることが要求されます。高い演奏技術を持ち、これまで数多く舞台を共にしてきた高橋さんと服部さんは一心同体の演奏を聴かせてくれることでしょう。

続いてホルンとトロンボーンのデュオ。阿部磨さんはソリストやゲスト奏者として数々の楽団と演奏を重ね、海外のコンクールの審査員も務めるホルン奏者です。トロンボーンの呉信一さんは大阪フィルハーモニー交響楽団の首席奏者を務めた後、現在は複数の音楽大学で教鞭をとりながら関西トロンボーン協会の会長も務める重鎮。この2人は、辻峰拓がこのコンサートのために書き下ろした作品をお届けします。呉さん曰く「クリスマスのイメージを含んだ曲」とのことです。新たな曲の世界初演を楽しみに待ちましょう。最後には名手4人が一堂に会し、クリスマス・キャロルでクリスマス気分を盛り上げます!

リストの魂を受け継ぐピアニスト

第3ステージには、人気ピアニストの金子三勇士さんが登場! 日本とハンガリーにルーツを持つ金子さんは、6歳の時に母方の故郷ハンガリーに単身で渡り、フランチ・リストが創設した国立リスト音楽



©Ayako Yamamoto

院大学に飛び級で11歳の時に入学、16歳まで研鑽を積み、リスト作品の演奏を中心に高い評価を受けています。

リストと言えば「ピアノの魔術師」の異名をとり、甘いマスクとピアノの超絶技巧でヨーロッパ中の女性を熱狂させた音楽家、という派手なイメージが先行しがちですが、そのような期間は彼の74年間の生涯の中ではほんの数年に過ぎず、実は人と音楽を繋ぐ社会的活動をアクティブにおこなった人物でした。若い音楽家たちに無償でレッスンを行ったり、才能ある作曲家の作品を世に紹介したり、大洪水があった時にはチャリティ・コンサートを開いて集めた義捐金を自ら被災地に届けたりと、社会や芸術の未来のためにリストが起こした地道なアクションは多岐にわたります。そんなリストが残したレガシーの1つともいえる音楽院で学んだ金子さんは、作曲家としてのリストはもちろん、その時代を生きる人間として世のために貢献してきた姿にも大きな尊敬の念を抱いている、と各所で語っています。金子さん自身もピアニストとして活躍する傍ら、若手演奏家の魅力を伝えるNHK-FM「リサイタル・パッシオ」の司会を務めたり、学校や施設に向いて子どもたちに演奏を届けるアウトリーチ活動を積極的に行ったり、音楽配信サービス上でコロナ禍でも自宅で楽しめるブレイリストを公開したりと、人と音楽を繋ぐ活動を地道に続けています。そんな姿を見ていると、若くしてリストの魂を受け継いでいるかのように思えてなりません。

今回のコンサートではリストの名曲〈ラ・カンパネラ〉をメインに、ショパン、J.S.バッハの作品を配した魅力的なプロ

グラムを披露します。ショパンやリストがサロンで演奏していたころのように、音楽や演奏家を身近に感じてほしいという金子さん。優しい語り口のトークも交えながら、聴衆の心と音楽を繋ぐ温かいステージを届けてくれることでしょう。

ソプラノ&バス・バリトン 魅惑の歌声



最後は、ピュアな声で聴く人を魅了し続けているソプラノ・幸田浩子さんと、温かく包容力のある声が魅力のバス・バリトン・久保和範さんによる声楽のステージ。ピアノは多くの歌手からの信頼を集める藤満健さんです。

幸田さんが歌うのは、イタリアの作曲家プッチーニのオペラ〈ジャンニ・スキッキ〉と〈つばめ〉のアリア。“私のお父さん”は、プッチーニ作品で最も有名なアリアと言っても過言ではありませんが、〈つばめ〉というオペラは聞いたことがないという方も多いかもかもしれません。それもそのはず、プッチーニ59歳の円熟期の作品でありながら〈ラ・ボエーム〉や〈トスカ〉、〈蝶々夫人〉などに比べると格段に上演回数が少ないオペラなのです。レハールらのオペレッタが華やかになりし頃、ウィーンの劇場からの依頼をきっかけに作曲された〈つばめ〉。初演は成功したものの、その後人気が続かず歌劇場の主要レパートリーとはなりませんでした。それでも主人公の高級娼婦・マグダが歌う“ドレッタの夢”はあまりに魅力的で、リサイタル等でしばしば演奏されています。詩人ブルニエがマグダのサロンで、“ドレッタ”という女性を題材にした新しい歌を披露しますが、その歌はまだ創作途中。その歌の続きを、マグダが自分の夢を織り交ぜながら創作し、真

実の愛は富よりも尊いものだと高らかに歌い上げます。聴きどころは後半に現れる心のひだを震わせるような高音。幸田さんの伸びやかな声で聴くと、本当の愛を夢見るマグダが舞台上に現前したかのように感じられるかもしれません。

バス・バリトンの久保和範さんは、モーツァルトと台本作家ダ・ポンテがタッグを組んで創り上げた名作オペラ〈ドン・ジョヴァンニ〉、〈フィガロの結婚〉から、それぞれの主人公が歌うアリアをお届けします。一口に主人公と言ってもそのキャラクターは対照的で、前者は女性相手に愛を甘く囁くプレイボーイの貴族、後者は軍隊行きの少年を皮肉たっぷりにかかかう知恵者の召使い。モーツァルトを得意とする久保さんによって、2人の登場人物がいまいきと描き出されることでしょう。

最後には、意地とプライドが邪魔をして素直になれない大人の恋愛を描いたレハールのオペレッタ〈メリー・ウィドウ〉から二重唱“唇は黙しても”、そして作曲家でもあるピアニスト・藤満健のアレンジによる“ホワイト・クリスマス”、“きよしこの夜”などで構成されるクリスマス・メドレーで聖夜のコンサートを締めくくります。

■公演情報

クリスマス・プレゼント・コンサート

2021.12.25(土) 17:00開演

【全席指定】一般¥3,500

U-25(25歳以下)¥1,000

●出演

池辺晋一郎(企画・おはなし)、上妻宏光(三味線)、高橋敦、服部孝也(トランペット)、阿部磨(ホルン)、呉信一(トロンボーン)、金子三勇士(ピアノ)、幸田浩子(ソプラノ)、久保和範(バス・バリトン)、藤満健(ピアノ)

●プログラム

青森県民謡:津軽じょんから節(旧節)
池辺晋一郎:バイヴァランスIX 2人のトランペット奏者のために
3つのクリスマス・キャロル
リスト:ラ・カンパネラ
プッチーニ:オペラ〈つばめ〉より“ドレッタの夢”
レハール:オペレッタ〈メリー・ウィドウ〉より“唇は黙しても”ほか

INFORMATION

※以下は10月6日現在の情報です。

公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

チケット・インフォメーション

《12.18(土)発売分》

■オルガン・レクチャーコンサート Vol.4
1.30(日)19:00

■藤村実穂子 メゾ・ソプラノ・リサイタル
2.23(水・祝)15:00

11月・12月の主な音楽イベント

コンサートホールATM

◆クリスマス・ツィメルマン ピアノ・リサイタル
11.19(金)19:00 予定枚数終了
料金[全席指定]A席¥10,000/B席¥8,000

◆M.L.R.(女声合唱)
11.28(日)15:00
料金[全席指定]一般¥2,000/高校生以下¥1,000

◆300人の《第九》出演者によるミニ・コンサート
12.12(日)13:00
料金[全席指定]¥1,000

◆クリスマス・プレゼント・コンサート2021
12.25(土)17:00
料金[全席指定]一般¥3,500/U-25(25歳以下)¥1,000

エントランスホール

◆小さな聴き手のためのコンサート たいようオルガン
11.3(水・祝)14:00 予定枚数終了
料金[全席指定]1階席 子ども(3~12歳)¥1,000
一般(12歳以上)¥2,500
2階席 子ども(10~12歳)¥800
一般(12歳以上)¥2,000

◆パイプオルガン・ブロムナード・コンサート(入場無料/要事前予約)
□11.14(日)12:00~12:30/13:30~14:00 湊彩花
□11.27(土)12:00~12:30/13:30~14:00 森永ナディア真莉子



水戸芸術館 @art_tower_mito
音楽部門 @ConcertHall_ATM
演劇部門 @ACM_theatre
美術部門 @MITOGEL_Gallery



水戸芸術館
@arttowermito



水戸芸術館 @arttowermito
ショップ @contrepoint_arttowermito

2021年10月12日発行(第247号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村晃、関根哲也、高巢真樹、篠田大基、鴻巣俊博、高木春佳

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30~18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社



編集後記

Lucky FM「みんなのクラシック」、10月は私が担当させていただきました。パーソナリティの石井哲也さんは毎週火曜22~24時の生放送「Music Pick up 80's&90's」も担当。「生歌王子」の異名を持ち、朝とは違う顔を見せて(聞かせて?)くれて新鮮です。(鴻)

メンデルスゾーンの(スコットランド)交響曲。終楽章の最後に第1楽章冒頭の旋律が帰ります。取って付けたようだと思いますが、私は好きな部分です。終わりに立った作曲家の微笑みがいしのように感じています。(篠)

原田禎夫さんと加藤洋之さんによる1年越しのベートーヴェン企画が実現しました。お二人の真摯に音楽に向き合う姿、そして4番ソナタの冒頭、ドルチェ・カンタービレのこの世のものとは思えぬ優しい響きは忘れられないものになるでしょう。(て)

◎ラジオ番組、好評放送中!

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜7:45~8:00 パーソナリティ:石井哲也(Lucky FM 茨城放送)

出演:音楽部門学芸員

学芸員がおすすめの曲を紹介し、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▼Lucky FM ウェブサイト
<https://lucky-ibaraki.com/timetbl>

▼radiko(ラジオ)でもお聴きいただけます
<https://radiko.jp/>



演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆新・未来サポートプロジェクト ADACHI HOUSE vol.2

『目指せ ミュージカル水戸黄門?』~冬の陣~ 11.6(土)発売

12.25(土)、26(日)各日14:00

料金[全席指定]

S席¥4,500/A席¥4,000

構成・脚本:井上桂(水戸芸術館演劇部門芸術監督)

構成・演出:橋本昭博

出演:安達勇人、神田真紅、はなわちえほか



前回舞台写真より 安達勇人LIVEシーン
撮影:刑部アツシ(おさかば写真館)

現代美術ギャラリー

◆佐藤雅晴 尾行一存在の不在/不在の存在

11.13(土)~1.30(日)

[休館日]月曜日※祝日の場合は翌火曜日

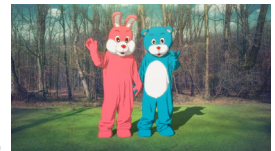
年末年始※12.27(月)~1.3(月)

[開場時間]10:00~18:00

(入場は17:30まで)

[入場料]一般¥900/団体(20名以上)¥700

高校生以下/70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料



(バイバイカモン)2010年

〈つばめ〉には
イタリア・オペラでは
珍しくビールで乾杯する
シーンがあるよ。



6才になる愛猫。爪を全然切らせてくれないわがまま猫で、1か月ごとに病院で切ってもらっています。その際体重も量るのですが、毎月体重が増えて只今7kg…。ご飯ねだる姿が可愛くて甘やかすすぎました…ダイエット開始!(春)

村上春樹さん著「古くて素敵なクラシック・レコードたち」には、演奏の面白い比喩が随所に。「大阪のうどん屋で食べる素うどんのような安心感」「鄙びた温泉に浸かっているみたいなホッとした気持ち」など、気取らない表現が味わい深い。(樹)

ピアニストの内田光子さんが、コロナの暗い影が世界を覆う中、少しでも早く日本の皆さんの前で演奏をしたいと、急速、10月17日にリサイタルを行ってくれることになった。内田さんは理想とする演奏を実現する為に、演奏回数も会場も限定して活動しているが、当館を選んで頂き、光栄の至りだ。(中)